

東大寺界隈から奈良町へ

奈良の 奈良の 大仏さんは 天火^{てんび}に焼けて
アリヤ ドンドン ドン コリヤ ドンドン
正面どなた うしろに誰がいる ………
違いました 違いました 舟のかけ

(奈良のわらべうた)

奈良の大仏は今も昔も大仏殿の中に居られますが、長い歴史の中で2回だけ、この歌のように「天火に焼けて」いたことがありました。1度目は平家の南都焼討ちのときでこの時は1181年から1190年までの9年間、2度目は戦国の兵火で焼失した1567年から徳川綱吉の時代の1709年までの140年の間、今建っている大仏殿はこの時に再建されたものです。

わらべうたには、それを伝えた人々の記憶が隠されているといわれます。この歌の短い素朴なフレーズは、奈良の町の不幸な時代の記憶を伝えているのでしょうか。たぶんこの町の人々にとって、大仏が露天のままにさらされているのは、あってはならない悲しい光景だったのでしょう。

今回は奈良の町を歩きます。この町は天平の昔、都の東辺の丘に突如として出現した仏教都市から歴史が始まりました。大寺の大伽藍と大塔が建ち並ぶ隔絶された古代の風景、やがてその風景の中に町が作られ、寺院と町衆が支えあう宗教都市へと発展し、幾つかの戦乱を経て、今なお日本で一番古い町として生き続けているのです。

今回の旅はまた、この町の二つのシンボル、大仏殿と興福寺の五重の塔を巡るたび。彼らこそはこの町の死と再生のドラマの主役たち、この町の過去を考え、そしてこの町の「いま」に出会うために、遠い歴史時間の中へと歩き出さなくてはなりません。



(明治に写された大仏殿)